

2025年5月4日復活節第3主日説教

使徒言行録9章1－6節、《7－20節》

ヨハネの黙示録5章11－14節

ヨハネによる福音書21章1－19節

一般世界の暦は5月に入り、2025年も3分の1が過ぎました。教会の暦は、復活節第3主日です。引き続きイエス様の復活について学びます。使徒書は、使徒言行録ですが、その中でもパウロの回心と召命の箇所です。まだパウロがサウロという名前で活動していた時のお話です。日課では《》に入っている箇所ですが、アナニアの「**主よ、私は、その男がエルサレムで、あなたの聖なる者たちに対してどんな悪事を働いたか、大勢の人から聞きました**」(使徒9:13)という言葉と、それに対する「**行け。あの者は、異邦人や王たち、またイスラエルの子らの前に私の名を運ぶために、私が選んだ器である**」(使徒9:15)という主の答えは、パウロを招く主なる神様の意図が、人間の思いを超えていることを示します。

使徒書は、ヨハネの黙示録です。本日の箇所は、4章から始まる天上での礼拝について語った部分です。内容は天上の事柄ですので、そのまま読んでも意味が分かりません。先のパウロの召命の出来事以上に、わたしたちの理解や思いを超えています。それゆえに、この黙示を受けて、わたしたちにできることでありまた大切なことは、「**玉座に座っておられる方と小羊に、賛美、誉れ、栄光、そして力が世々限りなくありますように**」(黙示5:13)と、イエス様を通して、主なる神様を信頼し、賛美することです。

さて、そのような使徒言行録と黙示録に比較しますと、本日のヨハネ福音書のお話は、不思議な内容ですが、まだわかりやすいです。20章では、復活したイエス様が、エルサレムでマグダラのマリアと弟子たちに現れたことが語られましたが、今度はティベリアス湖(ガリラヤ湖)で弟子たちに現れたことが語られます。弟子たちは、なぜか、ガリラヤに戻っており、元漁師であったシモン・ペトロは、「**私は漁に出る**」と元の仕事に戻ろうとします。また他の弟子たちも「**私たちも一緒に行こう**」と続きます。しかし、夜明けまで何も獲れずにいて、その彼らに復活されたイエス様が現れるのです。ただし、マグダラのマリアの時と同じように、弟子たちは、イエス様だとわからず、「**舟の右側に網を打ちなさい。そうすれば捕れるはずだ**」(ヨハネ20:6)という言葉通りにすると、大漁になって、イエスの愛しておられた弟子が、「**主だ**」(ヨハネ21:7)と気づき、わかるのでした。獲れた魚の数は153匹と具体的に記されていますが、その数に意味があるか否かは不明です。そして、復活されたイエス様と弟子たちの食事の場面となり、食事ののち、ペトロはイエス様から3回、「**私を愛しているか**」と問われます。これはペトロが3回イエス様を知らないといったことと対比されているといわれますが、もっとも大切な事柄は、イエス様がペトロに「**私に従いなさい**」と招いてくださることです。

さて、ヨハネ福音書は、イエスの奇跡や行動を「しるし」と呼ぶのが特徴です。その最大の「しるし」は、イエス様の十字架と復活です。また、「しるし」は、主なる神様がイエス様を通して人間に与える事柄です。一方、人間の側では、それに対して、「証し」が求められます。それは、「しるし」を理解することでも、認識することでもなく、それによってイエス様を通して主なる神様を信じ、告白することです。それゆえに、教会にとって大切な「証し」とは、イエス様が復活されたことの意味を受け止め、それを告白することです。その意味で、ヨハネ福音書の「しるし」と「証し」の関係は、教会が何によって立つかということと、教会が存在する目的は何かということを示しています。

この時、このヨハネ福音書が示す大切なことは、「証し」は人間の行動であるが、イエス様を通して示される「しるし」がなければ成立しないということです。「しるし」を抜きにしては、人間がその時の思いで大切だ、重要だと思ふ事柄は、教会の「証し」ではないのです。また、逆に、人間的な思いでは、どれほど希望がないと思われても、わたしたちはイエス様という「しるし」によって「証し」へと導かれるのです。希望のある道を歩むことができるということです。

本日の福音書箇所、弟子たちの奇跡的な漁とイエス様との食事の出来事は、「しるし」と「証し」が密接な関係にあることを示しています。それは絶望的な不漁であっても奇跡（しるし）が起こることがあり、しかし、大切なことは大漁であること自体ではなく、そのことを通して目の前にイエス様がおられることに気付き、それを告白すること（証し）だということです。また、奇跡ではない、食事という日常的な事柄であっても、そこにイエス様がおられる時、ペトロのように「証し」に招かれることも示しています。すなわち3回愛するかと問われ、従いなさいと招かれるペトロの姿です。3回も人間的な思いから失敗しても、イエス様は声をかけてくださり、その人に与えられた務めへと導いてくださったのです。教会は、この「しるし」と「証し」が起こる場所です。すなわち教会に属するわたしたちは、礼拝を通して、日常生活の中に復活されたイエス様のおられること、本来非日常的な事柄である「しるし」を受け、それぞれの「証し」へと促されるのです。

ペトロは、伝説ではイエス様に従った後、ローマで殉教したと言われていきます。それでも殉教を恐れ、もう一回、裏切りそうになったという伝説もあります。わたしたちは殉教を迫られるような世界には生きていませんが、今もイエス様は、「私に従いなさい」と一人ひとりに呼び掛けています。イエス様の復活を祝うとは、そのイエス様がいつもわたしたちに呼び掛けてくださっていることを確信することであり、また、その声に従うことが最も大切な事柄であると確認することです。この世界では、様々なことが起こっています。人間的な思いでは解決できない事柄も多くあります。だからこそ、教会の礼拝を通して、ともに祈り、一人ひとりに与えられている使命を果たしていきたいと思えます。